

# 第30期第2回京都市社会教育委員会議の模様を マナビィがレポート！



クリスマスと年末のムードが漂う平成23年12月21日（水）午後6時～8時，京都市生涯学習総合センター（京都アスニー）にて第30期第2回京都市社会教育委員会議が行われました。今回もわたくしマナビィがレポートいたします！

## 出席委員（13名）

井上 満郎議長，西脇 悦子副議長，井上 章一委員，大八木 淳史委員，奥村 高史委員，小辻 寿規委員，齊藤 修委員，佐伯 久子委員，茂山 千三郎委員，通崎 睦美委員，土井 真一委員，野村 佳子委員，松重 和美委員



## ■開会に先立ち，前回第1回目の会議に欠席されていた委員による自己紹介！

### ○ 奥村 高史委員 京都市人づくり21世紀委員会代表

2年間，京都市PTA連絡協議会の会長をさせていただきました。

今年，念願であった「[子どもを共に育む京都市民憲章の実践の推進に関する条例](#)」が施行され，この条例に基づいて設置された「子どもを共に育む京都市民憲章推進協議会」の会長をさせていただいており，子どものために何ができるかといった活動に全力で取り組んでおります。来年，PTAの全国大会が京都で行われます。その責任者もしており，日本中の子どもたちのために少しでも役に立てればと思っております。



### ○ 松重 和美委員 京都大学工学部教授

私は委員2期目になります。私の専門は電子工学ですが，別の分野としてVBL（ベンチャービジネスラボトリー），「起業する」「新しいものにチャレンジする」といった様々なプログラムを大学院生対象に行っています。また，小・中・高校生から何かにチャレンジすることが必要だろうと，できる範囲で連携したプログラムも行っています。

単に会社を興すのではなく，いろんなジェネレーションで何か新しいことにチャレンジし，世の中の何かに積極的に関与する取組をしています。



## ■開会 [井上議長]

## ■報告-1 第53回 全国社会教育研究大会 京都大会について

（事務局から）

- ・ 京都府教育委員会の運営で9月21・22日に行われました。台風15号のため開催が危ぶまれましたが，1,000名近くの人々が来られていました。
- ・ 全体会では，前・大阪大学総長（現・大谷大学教授）の鷲田清一先生による基調講演がありました。テーマは「度重なる震災からわたしたちが学ぶべきこと」。

## ○ 1日目全体会と2日目の第2分科会「地域を育てる」に参加された小辻 寿規委員から



全体会の講演で印象に残っているのは、大学生に対し殿（しんがり）を務められるような人材を育てていくのがいかに大事かという話をされたこと。皆を引っ張って先に行く、新しいことを始めていく人材を作ることが重要視されてきましたが、全体を見渡して支えていける人をいかに育てるかも今後の社会教育に重要になってくると感じました。

第2分科会「地域を育てる」では、NPOは志縁型、地域は地縁型と言われますが、NPOがキャンプを地域の子どもたちとともにやっていく新しい発想を見て勉強になったと同時に、NPOと地域がどうしたら融合できるのかの形を提示していただきました。

## ○ 第3分科会に参加された井上 満郎議長から

第3分科会「自分（社会教育委員）を育てる」というテーマは、委員の活動を育ての場・教育の場としてとらえることそのものに違和感がありました。しかし、委員としての活躍や社会教育委員会議が、自分自身を高めるのに役立っているとよくわかりました。社会教育委員をしておられる方は、都市部では当然その地域で育っていない方が多いながらも、社会教育・地域教育にどう関わるのかをそれぞれの方々が真摯に考えておられると感じました。



## ■報告ー2 京都市生涯学習市民フォーラム 平成23年度総会・シンポジウムについて

（事務局から）

- ・ 11月11日に開催された総会では本フォーラム堀場雅夫会長出席のもと、生涯学習推進者の表彰、新規加盟11団体の紹介や初めての試みとしてパネル展示（17団体参加）などが行われ、約400名の方に御来場いただきました。
- ・ シンポジウム「しあわせ発信都市・京都～本当のしあわせって、なに？～」のゲストは経済同友会の田辺親男代表幹事でした。田辺親男氏が代表幹事をおられる経済同友会では「ハピネス」特別委員会ではあわせについて調査等をされているので、しあわせという切り口で実施しました。

総会・シンポジウムの詳しい内容は、[教育委員会のHP](#)を御覧ください！！



## ■議事ー1 京（みやこ）まなびミーティングについて

（事務局から）

- ・ 本事業は今年度から始まり、社会教育委員の先生方が現場に出向いて講演会や授業を通じて新しい学びの場を提供いただき、そこで行われたものを社会教育委員会議にフィードバックしていただいで認識を深めていただくことを目的にしています。



マナビのレポートをぜひ読んでください！（タイトルからリンクします。）

- ・ 京まなびミーティングを実施していただいた各委員からの御報告

○ 通崎 睦美委員から…[京まなびミーティング\(1\)講演「アートをまとう ～銘仙着物と音楽」](#)  
佐伯委員が会長を務めておられる山科区の女性会から依頼を受けて、マリンバの演奏も交えながら音楽と着物の話をさせていただきました。

私は、大正から昭和時代、日常に着物があつた時代のアンティーク着物約600点をコレクションしており、またマリンバを5歳のときから弾いていて、5年ほど前から木琴も弾いています。戦後、ラクーア音楽伝道団というキリスト教の伝道団がマリンバを弾いて布教したことで、日本人は、



簡素で乾いた素朴な音が魅力の木琴の響きを捨てて、見た目も響きも豊かなマリimbaに走りました。時を同じくして、日本人は着物を捨てて洋服に走りました。私は捨てられたその2つが好きで人生を歩んでいるようなものです。おばあちゃんの話や少し聞くだけでわかるような、手の届くところに断絶・分裂された文化があります。見直してみると、「文化」や「エコ」という言葉にしても、本当の生活の中で何を意味するのかがわかっていきます。マリimbaの音楽を聞いていただいたり、着物も見ていただいたりして、どれだけこれが日常にあったかを実感していただくような話をさせていただきました。

○ 土井 真一委員…[京まなびミーティング（2）特別授業「みんなのことをみんなで決める」](#)

紫竹小学校で法教育の特別授業をしました。町内会のごみ収集所をめぐるトラブルで、ルールを守らない住民がいて話し合いたいという申入れが町内会長にあったという設定で、児童には、グループ毎に役柄を決め、収集所はどこにするのが良いか、ごみを出すルール等について、それぞれの立場に立って議論するという授業を行いました。



児童の議論や先生の授業の様子は、マナビィのレポートをぜひぜひ読んでください！

6年生児童が対象ですが、1人で考えるだけだとまだまだ不十分でも5～6人で話し合いをさせると大人が考える論点はほぼ出てきます。例えば、足の悪い老夫婦には配慮すべきだ、朝早くから店を開けているパン屋さん前にごみ収集所を置くのはまずい、など。あとは、こうした論点をどう判断し結論をまとめていくかです。これは大人でも難しく、子どもたちも苦労していました。授業後、子どもたちが提出してくれた感想の中には、「思った以上にいろいろな意見が出てきてびっくりした」「大人の世界は難しいと思った」とあり、実際に難しいということを体験してもらうのが授業の1つのねらいです。

正義や法、権利の問題には正しい答えがあり、それを教えてくれれば良いと思いがちですが、そうではないことをわかってもらうこともねらいです。我々はみな同じ人間なので対等に扱われなければなりません。人それぞれに個性があり、異なる事情を抱えているので、全ての人に同じことをするとかえって問題が生じます。そこでそれぞれの事情を話し、意見を交わしながら考える必要がある。それが民主主義で、その際一人ひとりの事情・意見を配慮することが公正・公平ということを理解し実感することが授業の2つ目のねらいです。

そして最後にみんなで苦労してたどり着いた結論として、「決めたルールはみんなでちゃんと守らないといけない」という規範意識を持ってもらうことが3つ目のねらいです。

ただ、一度の話し合いでこのようなことがきちんと身につくわけではないと思います。大人になれば、地域のごみや産業廃棄物の処理場をどうするかという問題もありますし、東日本大震災の災害廃棄物をどういう負担で処理をしていくかという問題と、今回のごみの収集所の問題は問題構造としては同じになりますので、これからも折に触れて子どもたちが考えてくれるきっかけになればと思っています。

実は、[授業を撮影した動画](#)もあります！！これは要チェック！



○ 西脇 悦子副議長…[京まなびミーティング（3）特別授業「伝統的な遊びを学ぶ」](#)

今の子どもは集団で遊ぶことが上手ではありません。家の中で個々でゲームをしたり、塾があったり…。子どもたちを9つのグループに分けて、順番にいろいろな伝統的な遊び（羽子板、百人一首、お手玉など）を体験しました。私はこままわしの担当でしたが、1年生なのでひもをまくことができない子が多くて、ひものかけ方からまず教えて「ひっぱる力でまわるのよ」「まっすぐしないとだめ」と言いながら、少しでも回せると大変喜んで、もっとしたいと言っていました。百人一首（ぼうず



めくり)で「蝉丸」など、そういう言葉を覚えたのも良かったかと思います。先生が模造紙で「福笑い」を作ってください、児童一人がやってみたところ、とっても面白い顔になって、遊びの面白さを知ったようです。お金を使ったおもちゃでしか遊んでいないから、素朴なものでも、自分で作って家族や仲間と一緒に遊べるとわかって喜んでいました。昔どんな遊びをしていたのかを聞いてきたり、羽根つきのカーンという音が嬉しかったとか、まだまだしたいと言っていました。

地域の中で関わらせていただきながら顔がわかってくることで子どもたちが大人を信頼してくれるので、こちらもっと子どもに声をかけるようになってよかったと思っています。



こちらもちろんレポートしております!!

○ 佐伯 久子委員…京まなびミーティング（1）通崎委員の講演を主催していただきました。



通崎委員、ありがとうございました。

銘仙の着物と音楽がどうつながるのだろうと想着いたら、着物が洋服に変わり、木琴からマリimbaに変わりと話をつなげていただき、子どもの頃、銘仙をお正月に着たり、小学生時代に木琴を叩いていた記憶もあり、両方がミックスして大変懐かしい気持ちになり、懐かしい曲も演奏していただき本当にみんなよかったと言っておりました。

○ 井上 満郎議長

今後の予定として、茂山委員が御担当されますので、感想等も含めまして御意見をお願いします。

○ 茂山 千三郎委員

私から提案させていただいた話ですが、最終的には「子どもたちに日本を好きになってもらいたい」という思いの第一歩。というのは、小学校の教科書から狂言が消えていた時代があり、能楽の協会から教科書に載せてほしいと嘆願を出して今年から『柿山伏』が復活したのです。しかし、現場の先生が狂言をどう扱ったらいいかわからない。読んで終わり。それでは狂言を面白いと思うよりも、嫌いになって終わります。狂言は教科書の勉強だけでは面白いはずがないんです。言葉の面白さは見ないと伝わらないし面白くない。日本人はこういうふうにしてものを作って来た、こうやって演じ、動きや構え、様式・型を編み出して来たことを子どもたちに教えてほしいなと思います。



教科書に狂言が載っている限り、毎年実施して、広めていただき、京都の狂言の扱い方が変わってきたな、子どもたちに「狂言面白いやん」と思われるところまでできるようになればいいなと思っています。時間のかかる話ですが、1つ目のハードルとして先生方がどう教えたらいいのか、そのヒントをレクチャーさせていただけるようなミーティングにしたいと考えています。

○ 井上 満郎議長

伝統芸能を継承し、どう伝えていくかはあらゆる分野で課題です。茂山委員の活動が狂言の普及につながればと思います。

第2回の土井委員のテーマについて事務局で議題が用意されています。

(事務局から)

- ・ 教育委員会では、子どもの規範意識を育むことを最重点課題の1つとして取り組んでいます。

「京都市子どもの規範意識を育むプロジェクトチーム」を立ち上げ、京都府における刑法犯少年の検挙人員や暴力行為の発生件数などの厳しい状況を踏まえ、家庭・学校・地域と関係機関が一体となって子どもの「規範意識」を育む取組を展開しております。

- ・ 取組状況としては、研究協力校における実践の取組のほか、生徒会活動の活性化に向けて、今年8月に「京都市中学校生徒会議」を開催し、中学校の各生徒会に向けた宣言とともに、大人に対するメッセージを発信しました。

また、子どもを共に育む京都市民憲章の実践も呼びかけています。



○「京都市子どもの規範意識を育むプロジェクトチーム」の委員をされている奥村 高史委員から  
京都市のPTA会長という立場で考えたことは、保護者がルール・マナーを守りなさいと胸を張って言える状況かということです。そこで、子どもたちにルールを守らせるのと同時に、私たち保護者もマナーやモラルを守っていきましょうという問いかけをPTA・保護者としてやっています。

「PTAの約束」ということで、保護者、あえて教職員という言葉も入れて、社会の「マ・モ・ル」（マナー・モラル・ルールの頭文字をとった造語）を保護者に対しての宣言を出しております。

一方、子どもたちに対しては、学校の先生方にいち早く動いていただき、現状をどう思うかを生徒会に投げかけていただいたところ出てきたのが中学生会議での子どもたちのアピール、宣言です。子どもたちは真剣に問題に対し討論し文章を考えてくれました。

なるほどと思ったのは、「～しましょう」という文章からありますように、私たち大人に対しても、子どもですらルールやモラルを守ることを意識するのだから、大人も守ってくださいねという気持ちがこもっているのではないのか、同じようなことを考えているんだなと感じています。その中で私たちは保護者を卒業して地域の人間になっていくわけですが、「人づくり21世紀委員会」の取組としては、団体行動が下手な子ども、友達と遊ばずに携帯電話やゲームばかりする子どもが増えていて、なるべく携帯電話を持たさないでおこうという活動も広がっています。地域での人とのふれあいは団体の規範意識を高めることは明らかですので、各地域で団体と協力してふれあい事業を行っております。子どもたちに大人と遊ぼう、話をしようという機会を設けて、子どもたちの規範意識を高めるような行動を行っております。

話から感じたのは、モンスターペアレンツは、親同士では意見を聞いてくれませんが、子どもから「お父さん、ごみのポイ捨てはいけないのよ」「たばこを歩きながら吸うのはいけないのよ」と言われると素直に聞いてくれます。長い間かかるかもしれませんが、子どもの教育を進めることで、私たち大人も身を改めて、友達・地域とが助け合う心豊かな社会を作れるのではないかと考えています。

### ○ 井上 満郎議長

規範という言葉そのものや内容は多様な側面を持っており、それぞれの社会集団で、規範意識は当然異なったものが出てくるので難しい課題かと思えます。土井委員はいかがでしょうか。

私たち保護者や教職員は、家庭の、学校の、社会の「マ・モ・ル」を守ります。

- 一、「いのち」を大切に、子どもを守り育てます。
- 一、すべての子どもの見本となり、ルールを守ります。
- 一、相手の目を見て、元氣よく、あいさつをします。
- 一、いつでも、誰に対しても、正しい言葉づかいを心がけます。
- 一、積極的に人とふれあい、コミュニケーションを大切にします。
- 一、誰もが気持ちよく生活するために、進んで掃除をします。

\*「マ・モ・ル」…マナー、モラル、ルールの頭文字をとった造語

マナー:気持ちよく生活するための知恵 モラル:道徳、道徳的規範 ルール:規則、規程

わたしたち京都市中学校生徒会議は、「京都市モラル」をテーマに、今日8月18日、京都市の8つの支部が1つに集まって、大人社会への8つのメッセージを発信します。

- き 希望あふれる未来を創っていきましょう
- よ よりよい環境づくりを励んでいきましょう
- う 嘘・偽りのない社会を創っていきましょう
- と 時を守り、場をわきまえ、人に礼をつくしましょう
- し 人権の大切さを知り、伝えていきましょう
- も 模範となる大人になりましょう
- ら LIFE(命)に感謝する気持ちを持ちましょう
- る ルールを人が守り、ルールに人が守られる社会を創っていきましょう

以上、8・18京都市モラルとして、ここに発信します。

平成23年8月18日

### ○ 土井 真一委員

規範意識を高めるのに重要なのが、それを守らなければならない理由をはっきりさせることです。それがはっきりしないと、「とりあえず守れ」となり、子どもの場合はなんとかしろと言われると反抗するだけなので、理屈立てることが大事です。

子どもたちは「ずるい」ということに敏感です。ルールを守らず「ずる」をし、得している人と損している人がいる。ルール破りは1回は得をしますが、2回目以降は相手にされず損をします。そのあたりを理解する必要があります。何が良いルールかを考えさせて、良いルールなら守らなければならない、おかしいルールは変えなければならないと持っていただくと規範意識の育成に必要ではないかと思えます。



### ○ 野村 佳子委員



規範意識は家庭それぞれで微妙に違う部分があるので、一律に決めにくいものです。がんじがらめに決めるのも問題があるし、大枠を決めると価値観の違いでずれることがあり、難しいと感じます。

命の大切さを子どもたちに教えるのも、人間は他の生き物の命を取って生きているところがあるわけなので難しいです。草木や虫を採ったらだめ、と言う一方で、採ったり触ったりして育まれる部分もあるので、一律な教え方ではなく議論して、ベストはなく、時代に合わせたよりベターな方法を模索することが必要でないかと常々感じています。

### ○ 井上 満郎議長

日本の子ども全員が守れるような規範を作るのは難しいです。日本社会の多様化もあります。

### ○ 齊藤 修委員



見当違いかもしれませんが、良くない道に踏み出すか踏み出さないかの岐路は、案外小さな行き違いではないでしょうか。そうであれば踏みとどまる力を大人がどう作るか、そういう環境や土壌をどう作ってやるかだと思います。広くそういう土壌を養成していくという意味では、土井委員が小学校で実践されたようなテーマで裾野を広げていったり、西脇会長のように遊びを通して、ルールやどうすれば面白くなるかの工夫を伝えれば、ベースのところで子どもたちが規範意識を育むことにつながっていくのではないかと思います。

こういうプロジェクトも大事かもしれませんが、幅広い形でそういう土壌をじっくり5年10年かけてやっていくテーマかなと思いました。

### ○ 小辻 寿規委員

我々の世代からすると、大人が作ったルールに子どもがうまく乗っかっているケースが多々あると思います。ルールを破ってはだめといっても、例外も実際多くありますから、もう一歩乗り越えたところで、ルールを変えていくとか、変えなくても我々はルールを守ろう、他の人のためにも破らないでおこうという自己の規範をどういうふうに作っていくのが今後の課題なのかなと思いました。

### ○ 井上 満郎議長

それを我々大人が子どもにどうアシストできるかということになります。

(事務局から)

この議論は、プロジェクトチームに社会教育委員会議からの提言という形で渡したいと思えます。

## ■議事-2 生涯学習啓発パンフレットについて

(事務局から)

- ・ 一昨年までのパンフレットは、京都市の生涯学習を推進するための取組の目標として、行政のマニフェストのようなものを作成していました。社会教育委員会議で頂戴した「事業紹介には良いが、市民が何をしたら良いのかわからない」という御意見から、反省をふまえて作ったのが23年度のものでした。(→右の表紙画像からリンクしています。)
- ・ 新パンフレットの企画案の1つとして、今年の「学びのガイドブック」としての製作方針を引き継いだものとしていきたいと考えています。あくまでも市民目線で、多くの市民が学び続けることの大切さ、学びの面白さに気づき、自分にあった学びの入り口を見つけるきっかけやヒントを得て、学び続けることへの興味関心を持たせることが狙いです。内容は、今年のパンフのように、実際に学ばれている方(具体的には委員の先生方や、生涯学習市民フォーラム加盟団体の皆様)のインタビュー記事をメインに構成し、自分の学びの体験をもとにした学びの楽しさ、とっておきの学び、学びのヒント・つぼを教えていただく内容にできたらと考えています。
- ・ 紙媒体の限界があり、パンフレットをネットに載せるのではなく、ネットのコンテンツを先に作って、それをまとめあげてパンフレットにするということができたらとも考えています。中身について御意見をいただき、今年度中に大方の方向性を決めておきたいと思っています。



### ○ 松重 和美委員

対象が非常に広いので、どのようにターゲットを考えるか。それをふまえて、定年を迎えた人から小中高校生まで、ぱっと目につくようなそれぞれの世代に応じた工夫があって良いのかなと思っています。手に取られた方々が何をやりたいか、何をやれるか。「行政としてこういうことをやっています」ということではなく、市民の立場で主と客を思い切って変えても良いのかなと思っています。

### ○ 野村 佳子委員

いろいろ議論なされて今年のパンフレットができたと思いますが、「あなたの学びをまちの力に！」というタイトルは、「ボランティア」が前に出ている感じがします。「あなたの学び、応援しているよ」と学びを刺激し、ページをめくることで「あなたの学びは実は地域の力になるんですよ」という持っていき方のほうが良いのではないのでしょうか。



かなりポジティブでやる気のある人は見てくださると思いますが、歴史や地域、コミュニケーションを少し学びたいなあというような方には、ハードルが高いかなという印象です。

### ○ 井上 満郎議長

そのとおりですね。ボリューム的に限りがあるので、インビテーション(学びへの招待)という役割が一義的であって然りかなと思います。

### ○ 井上 章一委員

「学びの」という言葉の使い方が、日本語としてややなじまないと思います。例えば、「学びの場」というより「学ぶ場」でしょうし、「学びの成果」というより「学んだ成果」でしょうし、「学び」をあくまで名詞として使う無理を押し通そうとしてるのではないですか。本当にみんなに溶け込んでほしいと思われるなら、日本語の使い方は保守的であっても良いのではないかと思います。



○ 奥村 高史委員

表紙はインパクトがあるものになるべきだと思います。今年のパンフレットは少しインパクトが弱いでしょうか。胸を張って京都は日本一のまちだと思っていますので、京都らしいインパクトや未来に希望が持てるような明るさがあってもいいのではないかと思います。



○ 大八木 淳史委員



表紙についての1つのアイデアとしては、客観的に無作為に評価してもらう第三者的な評価機構を使うとか、思い切って表題やデザインを公募にするとか違ったチャンネルで攻めるべきではないでしょうか。

男女・年代問わず、幅広く手に取りそうなアイデアを幅広く聞くことが必要かもしれません。

○ 小辻 寿規委員

表題を公募することも、皆さんがどう考えているかがわかって良いのではないのでしょうか。

インターネットの配信・活用も、京都市未来まちづくり100人委員会のパンフレット作りで意見をいただいたときに、これ1枚を見てわかるようにしてほしいと多くの方に言われた記憶があります。

インターネット配信も素晴らしいけれど、バリアフリーを考えたとき、パソコンを使えない方もいるのでそういう人も満足して使える「紙媒体」のパンフレットも作ったうえでインターネットの活用を考えていただけるとありがたいです。



○ 井上 満郎議長

これ1つで道案内ができるという形を考えるべきですね。

(事務局から)

- ・ 次回の会議で案を出していきたいと思っておりますが、今回、委員の先生方に京まなびネットの配信で、私のおすすめ本を募集させていただき、7人の先生方に紹介いただいたものをアップさせていただきました。それが大変好評で、パンフレット作成にあたってこのような形で、先生方の学びのつぼやヒントを発信できたらなと考えています。それに御了解いただければと思っております。

パンフレット作成への協力に了承を得ました！！



■閉会 [井上議長]

次回開催は2～3月頃を予定しています。

次回は市民の皆様が傍聴に来てくださるといいなあ…

■閉会挨拶

閉会に当たり、宮本昌昭生涯学習部長から挨拶がありました。

